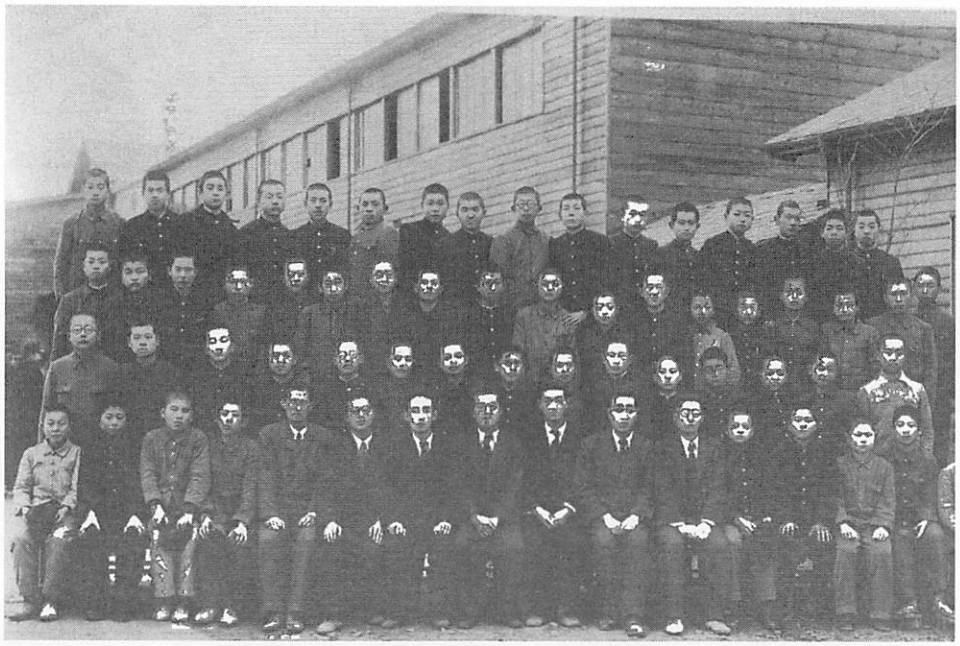
西朋　特別号

田中将利さんの思い出

西朋登高会
2007年8月

田中　将利

(1933.11.6 ～ 2005.8.28)



1949.3 西高１年生

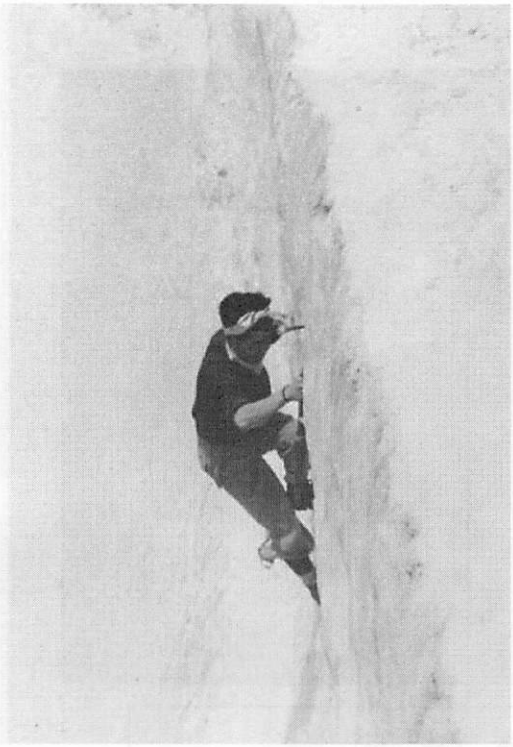
1950.10 記念祭
左から　SL 村田、CL 田中、SL 中野

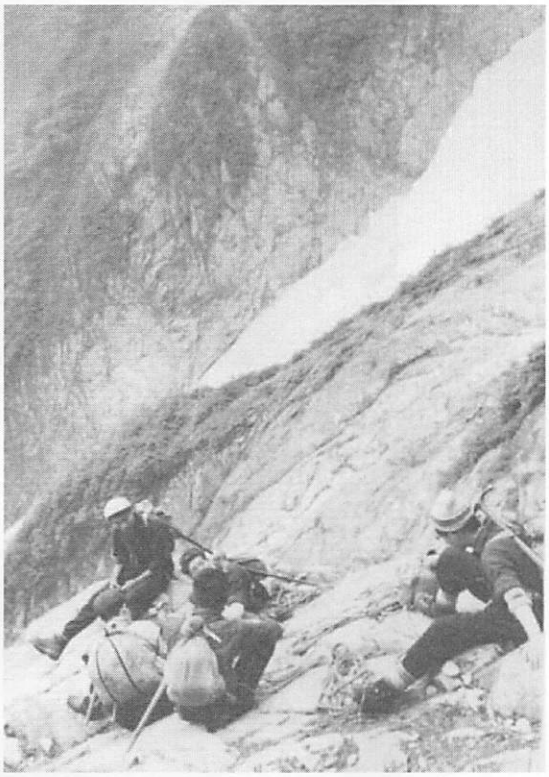
1951.11
火打石谷下部　Ｆ３

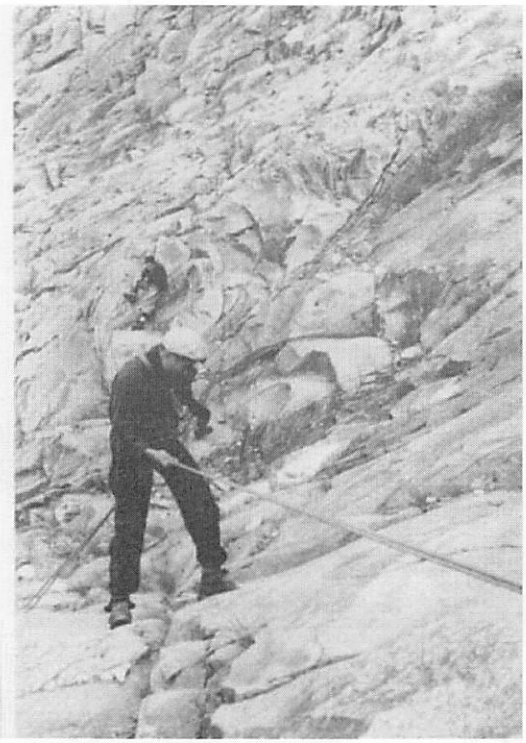
1952.3 多摩川南分水稜縦走　（大菩薩～奥多摩）

後列左から　下出、加藤、飯塚、斉藤、関谷、高橋
前列左から　　鴻池、　　田中、川村、中野

C１　建設







松田　稔さん提供（本文参照）

左上から時計まわりに

1．茂倉沢　雪庇登り 1960.6.5

2．一の倉沢での一休み 1960.6.19

3．一の倉沢（沢野さんの懸垂下降を見上げる将利さん）

1997.5 西朋総会

2004.4 西朋総会

刊行のことば

二〇〇五年八月二十八日、都立西高山岳部黎明期の中核メンバーであり、またそのＯＢ会である西朋登高会の創立メンバーにして、初代代表の田中将利さんが突然お亡くなりになった。

西朋の多くの方から将利さんの思い出をお寄せいただき、また都立西高山岳部（後にワンダー・フォーゲル部と改称）と西朋登高会の初期の記録の中から将利さんに関係の深いものを選んで、ここに一冊にまとめて「西朋」特別号として刊行することにした。将利さんの遺徳を偲ぶとともに、西朋の五〇年を振り返りたい。

将利さんを知らない人はいないと思うが、五十歳以下の人のために敢えて略歴を記す。将利さんは昭和二十一年（一九四六年）に旧制都立十中に入学、昭和二十四年に新制都立西高に四期生として入学された。記録によれば山岳部入部は二十四年の秋、二年生の時にチーフ・リーダーとなり、二年生の三学期に退部している。三年生の夏に山岳部の山行に参加しているが、どうも「部外協力者」だったようである。ところが、三年生の春山合宿ではチーフリーダーとして山行に参加している。その後、早稲田大学に進学し、早大山岳部で年間四十日以上の合宿に参加しながら、西高山岳部ＯＢ会（ＮＡＣ）を西朋登高会と改組して、実質的な初代代表となった。早大山岳部でもチーフ・リーダーを勤めている。卒業後は家業の田中金属に入社して事業に専念された。すなわち、山に精力的に登られたのは十年弱の短かい期間ではあるが、その後も強力なリーダーとして西朋登高会をひっぱり続けてこられた。西朋の総会にも時々お見えになり、亡くなられる一年前の二〇〇四年の春にもひさびさに「将利節」を滔々と語られた。五十歳以上の年齢差がある後輩でも感銘を与えられた者は多い。

将利さんは、小柄だががっしりした体格で重荷を苦にせず、西高山岳部では山行日数も同期で一番であった。例えば高三の春山合宿では、体重が最軽量でしかもリーダーでありながら、最も重い荷物を背負っている。ＯＢとして参加された西高の山行でも驚異的なスピードで歩いておられたとお聞きする。西高時代からスポーツアルピニズムの追

及を標榜し、その強烈な主張や個性から反発を招いた事は想像に難くないが、厳しさの裏に隠された仲間や後輩に対する責任感と思いやりは、本書の寄稿の中からいくつも発見する事ができるであろう。それは「鬼の四期」と呼ばれた同期の方々や、山岳部黎明期の先輩に共通するものでもあることが今回の編集をしていてよくわかった。

将利さんの現役時代は戦後日本の復興期であり、まだ日々の生活さえ大変な時代であった。一方、山の世界ではヒマラヤの八千メートル峰が次々と初登頂され、日本でも多くの岩壁や冬季のバリエーションルートが開拓されていった時代でもある。この小冊子にとりあげた記録のように、ポーラー・メソッド（極地法）で登るというような事は、そのような時代背景から「次の高み」を目指しての事であったのだろうと想像する。

近年の技術や装備の発展、政治や経済情勢から、海外登山も時間さえ作れれば比較的容易になった。西朋登高会として登攀史に残るような「遠征」はないが、個人的な海外登山はいくつも行われるようになった。トレッキングや山岳スキーが多いが、いくつかはバリエーションといえるルートも含まれる。

「高尾山でもスポーツアルピニズムはできる」というのは将利さんの言葉であるが、大事なのは、山の高低、難易度、遠近ではなく、自らの心の中、心構えに中にある、と私は解釈する。時代がかわっても、心の持ちようは不変であると思う。

西朋登高会は西高山岳部、ＷＶ部のＯＢ会である以上、西高生との繋がりは切っても切れないものであるが、高校生の登山についてはさまざまな困難がある。山以外での課題も昔から繰り返しあり、その時々の先輩が苦労して乗り越えられてきた。私たちもなんとか、将利さんを始めとする諸先輩に恥ずかしくないようにそれらの課題と取り組んで行こうと思う。

将利さんにこころより感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈りします。

遠藤　彰（二十六期）

目次

口絵
刊行のことば　i
第一部　寄稿
特別会員　安藤　英彌　3
特別会員　佐藤　満　4
二期　南波　貞敏　5
四期　笹田　英次　6
六期　林　武志　8
六期　川口　和雄　13
六期　稲田　弘美　14
六期　長谷川　富佐子　15
六期　小田　尚於　17
九期　松田　稔　18
十期　黒澤　隆　20
十一期　田中　康弘　22
十一期　関谷　興雄　24
十二期　梶内　俊夫　25
十七期　上遠野　清　26
十九期　山野　裕　28
二十一期　伊東　伸作　29
二十一期　渡辺　喜仁　31
二十一期　中村　正俊　32
二十一期　入戸野　まゆみ　33
三十五期　森川　直人　35
三十七期　上野　午良　35
第二部　部報・記録から　37
昭和二十五年度（西高二年）　39
四月・雲取山、七月・奥秩父主脈縦走
「今井君遭難について」
十月・甲武信ヶ岳、十月・カロー谷、
「山の高低の見方」
昭和二十六年度（西高三年）　51
三月・多摩川南稜縦走

昭和二十七年度（ＯＢ一年目）　65
五月・西高夏山合宿準備、
「昭和二十七年度第一期（四月～八月）公式山行総評」
昭和三十年度（西朋第三年度）　68
「第三年度の目指すもの」
四月・赤岳西壁中央リンネ、西朋第七号　編集後記
「資料より見たる積雪期魚沼山塊」
十二月～一月・魚沼八海山、西朋第十号　編集後記
昭和三十二年度（西朋第五年度）　81
十二月～一月　後立山縦走・爺岳東尾根
昭和三十三年度（西朋第六年度）　83
「再び高校山岳部について」
「現役指導を再認識する」
四月・狼火場沢奥壁、六月・谷川岳・東尾根
昭和四十一年度　88
「岳友は財産である」（彷徨への寄稿）
昭和四十四年度　90
「高校生のリーダーについて」（彷徨への寄稿）
平成十六年度　92
西朋　総会でのことば（口述メモ）
年　表　94
編集後記　96

第一部　寄稿

田中将利君と登山界のひとつの時代の終焉

安藤　英彌（特別会員）

「田中将利が死んだらしいよ。」と、別の筋の会合で話しを聞いたとき、僕の体には電光が走る以上のものを感じた。
「なんで、こんなに早く。」という感情と同時に僕の胸の中には、「ああ、やっぱり。」と誰にも語れない、あるいは説明のできない感覚が走った。

田中将利君との付合いは長い。実に長い。
大ざっぱに言って六十年。住所が近いこともあって、先代社長のお父さまとも、お母さまともお付合いすることも多かった。
都立西高等学校に、山岳部なるものを創設したとき、日本はまだ混とんとしていた。
敗戦に依って、すべてが失われたなかで、「なにを置いても山へ！」などという熱情に燃えることなど、平成の日本の登山界では理解すら不可能なことはよく判っている。
軍の放出品の編上靴（ヘンジョウカ）を貴重な登山靴とし、罐詰（カンヅメ）と握り飯（メシ）を用意して、暇さえあれば山へ登っていた頃。将利君もまた懸命に山に登っていたに違いありません。

そんな君が西朋登高会なるものを設立して、私が卒業生の筆頭会員に記録されている書類を見て、「山が本当に好きなんだな。」と心から感じ入ったのです。
大学でも同じ山岳部に入部して来た君は、口にこそ出さなかったが、「山に登りたいから、大学に入って来ました」と私にはすぐ判りました。
「山がそこにあるから」というのは、多分、一昔前の山男達の共通した思想であったと思いますが、将利君はそれを超えた山を登るために生まれて来た男だと、いまでも考えています。
それはもう、理念や思考を超えた世界で、山があれば、体が自然にその方向に歩いて行ってしまうと言った偏愛とも言えるたぐいのもので、それは、西高山岳部時代の私も全く同じでした。

大学を出た后も、君とはときどき、共に登りましたが、ここらあたりから将利君は私を抜いていったようです。

このことは、遂にいちども口にして話し合うことはありませんでしたが、山がないと生きて行けない君の気持は、私には痛いほどよく判りました。

しかし、これを追求してゆくと遭難と死の危険性はどんどん高まる危険があることを、君にいちども話さなかったことを今でも悔いています。

君は、その死の瞬間まで山登りの極限的な快感に酔いしれていたのではないでしょうか。地上でもです。少なくとも、私にはそう思えて仕方がないのです。

いずれ、冥土で会ったら、「そんなこと、初めから判っていますよ。」と言われそうな気もします。

一人の山を偏愛する男が死んで、日本の登山界のひとつの小さな時代が終わったのではないかと、私には思えて仕方がありません。

ご冥福を祈ります。

「お付き合いしたい人でした。」

佐藤　満（特別会員）

西朋の創設者で大車輪的な迫力で活躍されたことは超ＯＢの林　武志さんたちから聞いていました。

〇四年の西朋の総会と二次会（荻窪の新京）で初めてお目にかかりました。新京でテーブルに着いた時「西朋会のために力になって下さってるそうでありがとうございます」と親しみをこめて言われた。

翌〇五年の総会のあと新京に入ると先に来ていた将利さんが手を上げて私を招いている。何か温かい気持ちを感じました。この時、氏は「都教委から青少年の心身を豊に涵養を計るには・・・・意見や考えを求められており、折ある毎に登山や山歩きの効用の大きさを説いています」　私も全く同感ですと応えた時、強く手を握られたのを今も感じています。将利さんは二つ年上でありその時、その時代の流れや雰囲気を共有して生きてきている・・・・。

この人は若い時、やりたいことは岩をも砕く迫力で貫き、好きな女性には激しい気持ちで打ち込んで行ったに違

いないと勝手に思い込み更に親近の情が胸に広がった。もうしばらくの間おつきあいをしたかった・・・・と、残念に思います。
先達の思いや行動を引き継ぐよう心してゆくことが一番の供養と胸に納めています。

（追　想）

南波　貞敏（二期）

私の田中将利君との出会いは西高山岳部在籍中の頃では無く、もっとずっと後からの事であった。大学二年の冬だったと思うから昭和二十七年三月西高現役山岳部員の南ア仙丈岳登山に際して、ＯＢとして同行してもらえないかとの要請を受けた頃からであった。
その頃ＯＢには同期の中川君、一期下の笹野君、神島君等々、私なんかより遥かに優秀なリーダーが居るのに、何故私にお鉢が廻って来たのかはわからなかったが、その山行を契機に、又その后、福田、関谷、両君の葬儀の際にＯＢ会の委員長を仰せ付かったりした頃から親しく付合う事になった。最初の頃は、恐ろしく鼻っぱしの強い男だなあと云う印象であったが、私とは百八十度違った性格と云う事が、案外気の合った所かも知れなかった。しかし彼とは一度も一緒に山へ行った事が無かったし、山の話しに打込んだ事も無かった。
本当に彼と親密になったのは、私の還暦も過ぎてから彼の会社である田中金属の役員として入社してからである。彼は三代目社長として経営を切廻していた。世の中三代目と云うと馬鹿な駄目息子の事を指すが、彼は違っていた。受継いだ建築金物、釘、針金等々の卸し小売業では満足出来なかった。自分のアイデアで考案した物を、自分みずから値を付けて売りたかったのだ。
　だから彼は店の方を古参のベテラン社員にまかせ、自分は次から次へと新製品を考案しては作らせ、全国に売さばいて来た。中には或る程度成功した物もあったが、その殆どは今は消えてしまった。が、アルミのカーテンボックスがヒットした。勿論ただでヒットした訳では無い。そこにはそれ迄の経験と実績が物を云った。即ち彼独特のセールスが信用を作った。彼はカタログとサンプ

ルにすごく力を入れ、出来上るとダンボールの箱詰にして数百部毎に各地のデポに送っておいて、彼自身は大型のキスリングにそれを詰めて担ぎ、全国各地の主だった設計事務所、商社、ゼネコン、金物卸商、銀行、等々を自分の顔を見せながら売り歩いたのだ。各地で説明会を開催しデモンストレーションをして歩いたのだ。これは並大抵の事で出来る事では無い。だから彼は稚内から石垣島迄日本国中まず知らない所も無ければ知らない人も無いと云った大変な信用を作ってしまったのだ。正に山男でなければ出来ない事である。そんな事も知らない大手の商社やサッシュ工業会は、それっとばかりに真似を始めたが、彼はその一つ一つと血の滲む猛烈な戦いをやり打勝って来れたのも、その全国の草の根の信用を持って来たからだと思う。なかでも三井物産との戦は語り草になった。その戦の一端を私も実際に体験出来た。その際の彼は鬼の様であったのを良く覚えている。云い出したら利かない頑固な山男であったし、又公私の区別ははっきりとした所があったし、金には厳しかったが、使いっぷりも大胆で潔い所があった。その為か技術屋の私に対しても是非簿記を勉強する様にと、しばしば説教された。失って見て、本当に惜しい友であった。早すぎる。私よりも若いのに、なんとしても早すぎる逝き方である。

合掌

田中将利君の思い出

笹田　英次（四期）

この原稿を書こうとすると、私の頭の中で兄のことが走馬灯の様に一瞬に色々と思い出されて何を書いていいやら、まとまりがつかないことおびただしい。個条書きみたいにでもしないと収まりもつかないので、乱文、短文は許して頂きたい。

都立十中で諏訪漢先生の主催するハイキングで一緒だったことはあるのだろうが、兄を最初に意識したのは、高校一年の時だったと思うが、クラス替えで同室になり、しかもすぐ後ろが私ということで、何がきっかけだか覚えていないので大したことではないのだろうと思うが、机を投げたり、椅子を投げたりと大喧嘩をしたのが発端

であった。以来本当の友人になった。その時の実感は何と気の短い、負けず嫌いの奴だろうだった。

次ぎの印象は山岳部ができて、一緒に入部したと思うが山行を決める際の下調べの綿密さだった。私にはその様な習慣がなかっただけに研究熱心さは脅威に感じられた。後年彼と共にすることが多かっただけに、助けられた部分が随分と多かったし、調べに調べた結果の予測には目を見張るものがあった。その頃すでに兄はその行き着く先に早稲田大学山岳部があった様だ。当時の体力では大変だったろうに、研究熱心が助けたのだろう。

兄の考えの中に山行きの時のために普段のトレーニングが大事だと声を大にしていったことがある。それにはラグビーがいい（これも兄による早稲田情報に間違いない）と言う話で皆で盛り上がった。私は早速数人と体育教官の平山先生のところに行き、ラグビーがやりたい旨話したところ、同じようなボールを使う西高に新しくできたタッチフットボールと言うのがあるからそれで我慢しろといわれ、私は良くも考えずに入部してしまった。一部には故平沢君の様にサッカー部に入部した人もいた。確かに不断のトレーニングは大切であった。だが言いだしっぺの兄は部には入らなかったしトレーニング好きではなかった。結構なアジテータで私はそれに乗ったひとりのようだったが、今の自分を考えると機会と言うものは何処にでもあるか解らないと言うことになるのだろうか。

兄は他人のためになることは厭わないと決めていたのではないか。何回か私の（勿論私のためだけではないが）山行の先回りをして山頂で待つという手法を使われたことがある。計算かとも取れるが、私は兄自身が一緒に行けなかったが、急に心配になって駆けつけて来たと今でも信じている。私にとっては地獄に仏とでもいうことが二度程あった。

兄との思い出の中で今まで話をしたことはなかったがもう時効だろう。西高の後輩が槍ヶ岳の山頂で亡くなったのは、皆記憶しているだろう。あの後遺体を沢の中で薪で火葬した後、兄から呼ばれた「山で後輩を遭難させてはならないからずっと記憶を残すためにこれを食べて忘れない様にしよう」と二人で遺骨を食べたことが

あった。青春小説にでも出て来そうな話だけれどこれは本当です。それが関谷君、福田君で破れた時はつらかった。この二人の救出の時に現地に行きたがった私を留守部隊として本部を置いた田中家に貼り付けたのは、無理をしそうな私の雰囲気を感じたのではないだろうか。その通りだった私にはその様な気持ちがあったのは確かでした。これがきっかけになって、私は山からフットボールへと傾いてしまったのも一つの事実です。兄の山に対する、後輩に対する、同輩に対する気持ちには今でも頭が下がる思いです。

今兄は天国で長崎君、佐藤君、平沢君、一年下の加藤君、二年下の関谷君、福田君らと楽しく山に登っていることだろう。しっかりルートを研究でもして待っていてくれ。もう遭難なんてない所だから、額に筋を立てることもないよ。私は急ぎたくないから、ゆっくり行くから、現世にいる凡人たちを、昔の様に守ってやってくれ。今、私は山の歌を唄うことができない。何故なら涙があふれてしまうから。兄らと一緒に心のそこから山の歌を唄う日が来るのをゆったりと楽しみに待っていろよ。私は未だ浮世でやることがあるんだ。

「再見」

将利さんのこと

林　武志（六期）

初めて将利さんを知ったのは、昭和二十六年（一九五一年）四月、小生が一年で、初めて山岳部の会合に出席した時だった。三年生の部長が山岳部について、いろいろ話をしていたと思う（内容は記憶無し）。その会で奇異に感じたのは、体の小さい人が教室内をうろうろして、時々偉そうに発言をすることだった。その発言を止める三年生は居ない。

その後聞いたら、地理研究部の田中将利（三年生）と分かった。（山岳部との関係が分かったのは大分後のことだったと思う。）

昭和二十六年の夏山は、奥秩父主脈縦走だった。本隊は、信濃川上駅から信州峠を越え、金峰、国師、甲武信、

雲取、氷川（奥多摩）駅へ。分隊は、塩山駅から柳沢峠を越え、将監峠で本隊に合流するという山行だった。本隊は、三年七人、二年三人、一年二人（福田、林）。分隊は、三年三人、二年一人、一年五人（人数は不正確）と記憶する。

金峰で暴風雨に遭遇し、福田が足がつって歩行不能になった。緊急処置として福田を三年生が背負い、三年生のザック（共同装備等が入っている）を林が背負い、福田と林のザックを五丈岩下に残すことにした。そして大弛小屋（無人）に泊まった。翌日は晴天で、三年の笹田さんと林が、五丈岩へザックを取りに行き、そして本隊を追った。甲武信に着いた時には真っ暗だった。這い松の中から、いきなり懐中電灯を照らされ、びっくりしていると「ご苦労さん」と労いの声を掛けてくれた人がいた。それが将利さんだった。

将利さんは、この山行が心配で、三年生の長崎さんと東沢から登ってきたとのことだった。山岳部を離れても、山岳部のことを心配していたことを実感した。

昭和二十七年九月、夜間大岳山集中登山をした帰路の出来事。御前山から湯久保尾根を下り、時坂峠を越えて、さらに臼杵山へ登り、五日市駅へ歩いた。時坂峠を越えて臼杵山に登るのことは計画には無かった。しかし、ある事情で変更した。（リーダーは、三年の加藤さんだと思う。ある事情については省略する。）

この山行には、ＯＢとして将利さんが参加していた（浪人中でありながら）。時坂峠手前で休憩した時に計画変更が伝達された。多くの者は、疲労しているので不満であった。二年生の関谷が代表して抗議した。ついでに、日頃の将利さんの指導方針についても泣いて訴えた。小生を含めた大半の部員は、日ごろの鬱憤を晴らしてすっきりした。将利さんはたじろぐことなく「自分の方針に従えないものは去れ！」と言ったような気がする。

（全員が臼杵山に登った。）

付記：「可愛い後輩を山で殺してはいけない。」この言葉は、将利さんから再三聞かされた言葉だ。西朋登高会が街の山岳会との違いはこれだ、と教えられていた。

将利さんの同級生が奥多摩で、個人山行ではあったが木馬路から転落して後遺症の残る大事故を起こしたことが大きく影響したと思われる。それだけに、我々後輩に対する指導は大変厳しかった。しかし、我々後輩は、それを理解できず、単なる「しごき」と受け止め、反発、抵抗した。

その真意は理解できるようになったのは、高校を卒業してからのことだった。

昭和二十七年九月、前記の事件が発端で、山岳部が二分した。

1　スポーツアルピニズムを信奉する将利グループ

2　楽しく山歩きをする、ハイキンググループ

十月、十一月は、それぞれの山行を実施した。十月の記念祭は合同で実施した。生徒会の山岳部に二つのグループがあるのは良くない、との将利さんの指導で、山岳部の方針を明確化することになった。十月、十一月、連日放課後、二年と一年で部会を開き討議した。

その結果、十二月にスポーツアルピニズムを基本とした部則が設定された。十数人いた二年生の多くが退部し、泣いて抗議した関谷はじめ、福田、川口、林、女子二年の伊藤が残った。

（その時苦労して作った部則が、押入れの書類なかに残っている筈だが、その内探し出そう。）

昭和二十七年八月　西高山岳部、初の北アルプス合宿が実施された。烏帽子から槍の裏銀座縦走後、涸沢定着だった。都筑教頭、ＯＢ将利、平沢、二年福田、関谷、林、高橋　七名。

都筑教頭の家が松本にあったので、ここに一泊して、米の調達を主に準備をした。鷲羽岳では、豪雨に見舞われ、三俣蓮華小屋に緊急避難した。身体がすっかり冷えてしまったが、都築教頭は、ニヤニヤしながら「僕はこれが有るから寒くないよ。」とザックの底からポケット瓶を取り出し舐めていた。

涸沢定着合宿は、将利さんの奔走で何とか無事終了で出来た。今では考えられないことだが、先ず指導者探しだった。先輩は数少なく、東大の竹内さん、早稲田の安

藤さんは、まだ西高の面倒を見る余裕がなく、山岳部ではないが中大の山田さんの友人二人をやっとお願い出来た。ピッケルも先輩、知人にお願いして何とか揃えることが出来た。(登山靴など珍しい時代。小生は、米軍放出の軍靴をアメ横で買ってきて、自分で三種類の鋲を打ち付け、初めての雪渓訓練、岩登り訓練に臨んだ。)

岩登りの基本を北穂東稜で一日、雪上訓練を一日そしてザイテンから奥穂往復。大変充実した合宿だった。下山は徳本峠経由で島々駅まで歩いた。

平沢さんのこと

昭和二十六年(一九五一年)八月、奥秩父主脈縦走の時、本隊の三年生として平沢さんが参加していた。ある三年生が、サントリーの角瓶を忍ばせていたらしい。それを飲ませろ、飲ませないと争っているのを小生が目撃し、三年生に対する不信の念を持った場面だった。後日三年の長崎さん、森沢さんから「面目ない。」と謝られた。

平沢さんは、寡黙な人だが、一旦自分の意見を静に表明すると、頑として変えない頑固さがあった。小生には、怖い人との印象だった。しかし、或る時はニコニコと、大変幼いしぐさが見られた。典型的なのは、空腹になると、がらりと性格が変わってしまい近寄り難くなる。腹が満たされると、又ころりと柔和な、面倒見の良い人になる。

面倒見の良いことでは、小生大変にお世話になった。小生がパソコンを始めたのが六年ほど前だった。当時平沢さんは、本宅が旭川市内、別宅が美瑛にあった。(十年程前に訪問して美瑛、朝日岳等を案内してもらったことがあった。その後メールで頻繁に連絡していたので遠く離れている事も忘れていた。)メールについては、懇切丁寧にメールを出す度に指導して頂いた。大変有難いことだった。

二年前、CD関係がうまく作動しなくなってしまった

ら、頻繁に指示を送ってくれた。小生が真面目に対応しないと、「どうなった。やりっ放しは、嫌いだ。」と怒られた。最後は、「対応しないなら絶縁だ！」と宣言されてしまった。

その後、ＰＣを更新して、支障なくお付き合いを続けさして頂いた。昨年「来年には東京へ引っ越すから。」とメールが入った。今年一月には「これから仮引越しをし、五月頃に本格的に引越しをする。住所とアドレスが確定したら連絡するから。」とのメールだった。そして、二月二十三日「ADSL 開設し速度が速いので驚きました。」とのことでした。

その後、山岳部と西朋の歴史については、平沢さんが詳しいから、とメールしたが応答無し。電話をしたら「使用されていません。用件のある方は・・・（娘さんの電話）」。娘さんから「三月二十七日に亡くなりました。」と伺い、絶句した。

昭和三十一年（一九五六年）正月の山行は、八海山だった。戦後初めての積雪期登頂だ、と麓の神社の飲兵衛神主に言われた。千本檜小屋までは、胸までのラッセルを強いられ、苦労した。岩峰下にＡＣを設定し大日岳を往復した。登頂隊は、平沢、林の二人だった。ガスで周囲の様子が分からない中を、只管に岩稜をアンザイレンして進んだ。大日岳に登頂直後、小生がザイルを整理している時、平沢さんが数歩稜線を進んだ瞬間、左へ張り出していた雪庇を踏み抜いてしまった。幸いピッケルが根元まで刺さって、体重を支えてくれた。平沢さんは、右手一本でぶら下がった状態になった。驚いたことに、懸垂よろしく、その右手一本で体を引き上げてしまった。落とした雪庇は、ガスの中に消えてしまった。「一寸オゾカッタナ」と一言。何も無かったようにＡＣへ帰幕した。テントに入って落ち着いたら、改めて恐怖感で体中が震えた。

□共に汗を流した仲間の冥福を祈ります。

二期　林春彦

四期　長崎正躬、佐藤信治、田中将利、平沢勇

五期　加藤鈴夫

六期　関谷徹、福田宏二郎
八期　京田守弘

以上　（06.7.17.　六期　林　武志　記）

将利さんとウィンパー

川口　和雄（六期）

西高時代に強烈な印象を受けた先輩が二人いた。一人は最初に入部した卓球部の世界チャンピオンになった荻村伊智朗である。スリムな身体で強い情熱と研究心で卓球に取り組んでいた。アウトドアスポーツに憧れていたのと卓球の才能が無かったので一年の冬に山岳部に入ったら荻村伊智朗と同じタイプの先輩がいた。それが将利さんだった。いかにして安全でより高度な登山を科学的に行うかというアルピニズムを常に目指していた真のアルピニストだった。早稲田の山岳部で天気図をラジオで聞いて描いて翌日以降の行動に備える気象係は将利さんが最初だった。三年の時、記録係として春山合宿「畳岩尾根より滝谷登攀」を記している。田中さんらしい優れた記録である。この合宿で田中さんと私は涸沢岳のコルに第三キャンプを建設するためルート工作に出かけ強風の為二人共顔に凍傷を負っている。社会人になってしばらくして山から疎遠になった私に将利さんがウィンパーの「アルプス登攀記」を読むように薦めてくれた。その影響で七年前から夏にアルプスに行くようになり、モンブラン、ユングフラウ、ドロミテの岩登りなど昔の仲間と楽しんできた。事業に専念され実際の登山が出来ない中で後輩と部の活動に理解を示し海外遠征の度に多額の援助を惜しまなかった将利さんは最後迄山を愛していたに違いない。田中さんを追悼してウィンパーの言葉を捧げたい。

「登山をする者は苦しまなければならない。しかしその苦しみから力が（それは筋肉の力だけを云っているのではない。それ以上の力なのだ。）生まれてくる。全体の機能が目覚めてくるのである。そしてその様にして生まれた力から楽しみが湧き出て来るのだ。登山は私に人生にとっても最も大切なもの二つ―　健康と友情　―を与えてくれたのである。」　この後のウィンパーの警

告は将利さんからいつもいわれた言葉と同じである。勇気と力だけがあっても慎重性を欠いたら無いに等しい。一歩一歩慎重に！

将利さん、この言葉を胸に刻んでこの夏マッターホルンにトライして来ます。

合掌

「こわかった先輩」

稲田　弘美（六期）

昨年九月、突然田中将利さんの訃報に接しまして、あんなにお元気で丈夫そうでした方がと信じられない思いでした。

私は高校の山岳部の頃は、こわい先輩として遠くから崇めておりました。

当時の田中さんは、女性達の登山にはあまり参加されることはなく、男性部員の方達と高度の技術を磨き、アルピニストを目ざしておられた様に思います。部会での後輩に対する指導は厳しく、気のゆるみを引き締める意味合いもあったのかも知れません。

卒業後三十五年も過ぎた頃、私達のリーダー役を時々して下さった五期の加藤さんが亡くなられた折に、久し振りに田中さんにお会いしましたが、若い頃の印象と違い、お話上手で社交的になられていてびっくりしました。

最近になってＯＢの方達とお目にかかる機会もできてきましたので、又お会いすることもあるかと思っていましたのに、残念なことです。

私が入部した頃、刈寄山、市道山に男子部員等と共に参加して下さった田中さんが思い浮かびますが、先輩として何かと御指導下さったことを、心から感謝申し上げます。

どうか、やすらかにと御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

以上。

（追　想）

長谷川富佐子（六期）

一九五一年春　私　山中富佐子（旧姓）は何の考えもない侭　西高に入学してしまったのです。当時山中の家は久我山にあり、西高は距離的に一番近い学校でした。私は父を戦争で亡くし、母と女の子四人という女の世界で育ちました。中学で男女共学を味わってはおりましたが、高校に入り圧倒的に多い男子生徒におどろきの日々でした。そんな折によりによって山岳部に入部したのかと、当時を思い返してみても、何故？どうして？という答えしか返ってきません。

西高山岳部始まって以来の女子部員四名のうちの一人となりました。体力も根性もなく山の何かも知らず山岳部に籍をおき、そこで初めて田中将利さん他、四期、五期の錚々たる先輩諸氏を知ることになります。

新人歓迎会、夏合宿、スキー合宿等々人生初めての経験ばかりでした。キスリング、ザイル、ピッケル、ハーケンその他　物の名前を覚え、飯盒炊爨で食事を作りと男子部員と差別はなかったと思っています。少々の労りはあったのでしょうが女子だからという特別待遇はありませんでした（？）

数々の山行の中で将利さんはいつもカモシカの皮を腰につけ軽々と部員の間を前に後にと動き回り指示を出していたと記憶しています。すごい大人という感じでした。社会人になってからは気侭に山にも行けずスキー合宿等どちらかというと愉しみの方に流れてしまいました。自分の給料で山の道具を揃え、スキーも手に入れ一端の山女になった気分でした。

将利さんの思い出を何かと問われた時に実は私には忘れられない出来事があるのです。当時の将利さんは山の先輩というより格の違う登山家という存在でした。今も印象に残っている出来事とは、私が社会人になって間もなくのことでした。突然電話があり「お願いがあるので新宿東口に〇〇時に来て欲しい」とのことです。乙女心に何事とドキドキし乍ら待ち合わせ場所に行きました。約束の時間はどんどん過ぎていきます。その間どれ程不安でいたことでしょう。凡そ2時間程遅れてご本人が現れたのです。将利さんは私が待っているとは思っていな

かったのでしょう「悪い悪い待っていたの？」と一言、そして早速に用件・・・ある包みを手渡たされ「申し訳けないがこれを〇〇さんに返して欲しい」と頼まれたのです。それが何を意味するかもわからず私は只、わかりましたと受けたのです。ホッとした気持ちと重い物を受け取ってしまったという意識はありました。

数年がすぎその時一つの淡い片思いが終わってしまったことに気付く始末です。その時の将利さんの照れたような複雑な笑みを思い出すのです。余り年はちがわないのに彼は本当に大人でした。私はといえば洋画に凝っていてタイロン・パワーやゲイリー・クーパーが憧れの人でした。月日の流れは早く私も結婚、子育てと様々なことを体験し、主人と地方に赴き東京に戻ったのは子供が中三と小五になった時でした。それから何年かは慌しいの一言です。その歳々の内に山岳部の先輩が加藤鈴夫さん、佐藤信治さん、林春彦さん等々鬼籍に入られた方の葬儀に出席し久し振りに懐かしい方々と出合うことが出来ました。

林春彦さんのお通夜の時に将利さんとゆっくりお会いすることが出来ました。斎場の近くのお店で六名程で卓を囲み相変わらずの名調子で雄弁に語っていられました。新社屋が出来たこと、取引が順調なこと等、本当に元気そうで楽しそうでした。この時が最后になるなどと思いもいたしませんでした。

昨年電話連絡で訃報の知らせを受けた時は只々驚きでした。何か事故でもと真先に思いました。少々太られてはいましたが恰幅も良く健啖振りも見事でしたのに！

年々歳々人同じからずなのでしょう。

この二年程友の会の旅行に出席し昔話に花が咲き楽しい時を共有させていただいています。山に登ったこと、スキーをしたこと等々今の高校生に比べ何かと幼かったことか、過ぎ去った日々を良い思い出として懐かしんでいます。これからも足と口が達者なうちはご一緒出来ますよう願っています。拙い文章ですがこうして記すことで多くの思い出に会えました。

最后に将利さんをはじめ鬼籍に入られた方々のご冥福を心より祈ると共に会員皆様のご健康を願って終わりたいと思います。

2006.8.6 長谷川　富佐子（旧姓　山中）

「まさとしさん」と私

小田　尚於（六期）

私の西高での部活はタッチフットボール部だった。山岳部に入ったのは二年生になってからだった。すでに山岳部員であった中学時代の友人に「おまえは北海道から来たのだからスキーくらい出来るだろう？」と山岳部のスキー合宿に誘われ、スキーならばと参加したのがきっかけで、たいした考えもなくただなんとなく入部してしまったのだった。

そして私が山を通して将利さん（我々はいつも先輩をそう呼んでいた。四期の先輩同士が姓でなく名前の方で呼び合っていたのでそれを真似た訳だが、さすがに呼び捨てはできず「さん」づけだった。そのような方が何人かおられる。）の薫陶を受けたのは高校二年間と学生時代（西朋登高会）の四年間の計六年間だった。（そのあと就職した私は北海道に赴任し山との縁は遠くなった。）

その六年の内の一時期、私は「西朋」の編集発行を任されたが、ワープロもパソコンもない時代でガリ版には大変苦労した。編集しながらガリ版をきるわけで失敗は許されないから緊張の連続で、なんとか仕上げるために将利さん宅へ度々足を運び教えを乞うたことを思い出す。

なにしろガリ版で飯が食えるほどの先輩の字を真似ようと努力したのではあるが、すべては無駄な努力だったようだ。

将利さんの山に対する考えは、氷川神社での例会や山行の準備会などでよく聞いたが、非常に厳しいもので、意見の衝突から退会していった人もいたくらいだ。登山に対する理論・哲学は、なんとなく山に行きはじめた私には仲々理解しがたく、出来の悪い後輩だった。

話は変わるが、将利さんは酒が飲めない。（これだけは先輩に勝っている。）にもかかわらず、酒の席にもいやがらずに参加される。いやむしろ自分からすすんで声

をかけ居酒屋に入ることもあった。自分はコーラを飲みながら酔っ払いを相手に違和感なく話の中に入ってこられ、巧みな話術で場を盛り上げ、気がついたときには自分の本音や内緒話などを喋らされていた・・・なんてこともよくあった。話し好きではあったが聞き上手な方でもあった。

私が札幌勤務のとき「いま札幌に来ている。飲みにいこう。どこか案内しろ。」とブッキラボウだが味のある声で電話があった。旭川にいた先輩を呼び出し一緒に飲んだことがある。遠く離れた後輩を忘れずに声をかけてくれたことがとても嬉しかった。細かい心遣いをされる方でもあった。

なんといっても将利さんはいつも存在感にあふれており、準備会にしろ報告会にしろ私は将利さんと山の話をするのがとても怖かった。山に関しては妥協を許さない厳しさがあった。

しかしその反面、酒（コーラ）の席では人生観など堅い話から「よく素面（しらふ）で言えるよな」という下ネタ話まで話題は幅広くとても愉快な方でもあった。　そしてまた、人情味のある方であった。

＊　あのころは　よかった　の　あの　ころはいま
今一度、コーラ（酒）を飲みながら話してみたい
人である。

「将利さん！少し早かったよ！」

（ＨＩＳ）

（追　想）

松田　　稔（九期）

生来の筆無精の為かなまじ洒落た追悼文を書こうという気取りが有る為か気に成りつつも中々机に向かえない。締め切り日が迫りやっとＰＣに向かい西朋通信を拡げて見ると「平沢勇様が三月二十七日に亡くなりました、ご冥福を祈ります」と有った。愕然として四期の名

簿を改めて見ると長崎様も佐藤様も既に亡くなられている。キットあの世で色々楽しくやり合っているだろうなと思い、先輩諸氏の思い出を新たにすると共にお冥福をお祈り申し上げます。

思い返してみると私が田中将利様に始めてお会いしたのは昭和二十九年無事西高に合格し山岳部に入部した四月だったと思う。アルピニズムとは何か又山岳部は如何に有るべきか、ポーラーメソード（極地法）の理論等中学を出たばかりの私には全く異次元の話に聞こえる高尚な理論を色々伺い「さすがだ」と感心したのを今でも覚えている。何分にも五十四年以上前の話であり具体的内容は正確に記憶している訳では無いが、その後の世の中の動向を見た上で振り返ってみると、当時田中将利様が我々出来の悪い後輩に諭す様に話されていた内容は皆先見性に富み現在聞いても新鮮に感じる話だったと思う。

はたして自分は将利様の様に山に対する無垢な情熱を後輩達に語りかけて来ただろうか？と改めて反省してみると全く慚愧に堪えない。

将利様と云われて次に思い出すのは、高円寺の早稲田通りに面してそびえ立つ笹田様設計と伺っていた田中金属のビルであり、事があるたびに高円寺の駅から細い路地を通って何度もかよい、何やら打ち合わせをしては将利様に色々とお知恵を拝借した事である。しかし、どうやら人間の記憶に残っている事象は物事の重要性とはあまり関係が無い様であり、肝腎の将利様から伺った話の内容は全く憶えていないのに、お姉さまか誰かが棟方志功が如何に素晴らしかの話をされていた内容は鮮明に憶えているのだからしょうがない。久しい以前から神奈川県に住む様になり高円寺には四十年以上行っていないので、どのように変わったか機会を見つけ車ででも通ってみたいと思っている。

今回追悼文を書くにあたり静かに振り返って見る迄、将利様と山に同行した事は無く、山での思い出は高校の夏山合宿に際し徳合の早稲田体育会の大型テントの前

で色々話を伺った位かなと思って居りました。所が旧いアルバムをめくって見ると少なくとも一九六〇年六月五日の茂倉沢（写真1）と同年六月十九日の一の倉沢（写真2＆3）には将利様が同行され我々を手取り足取り指導しているのである。恥ずかしい限りでは有るが、思い出の記憶はリセットしないと一年で半減すると云われて居りますので、四十六年前の話は四十六回も記憶が半減し、今では約七十兆分の一に減っていると云う天然自然の大法則に免じてお許し願いたい。

将利様が熱心に導こうとしたアルピニズムは何一つ追求しようとせず、就職何年か後には山から離れてしまった出来の悪い後輩ではありますが、最近は年と共に山に掛けた青春時代が有った事を懐かしく思い出す事が多くなりました。改めて将利様のご冥福をお祈り致します。

写真には下記の書き込みが有りましたが、此れ又書いた記憶は全く無い。

写真1：「グット無理しての雪庇登り」
写真2：「一休み」：左十二時より時計廻りに沢野、田中（マ）、田中（ヤ）、米野／右は橋本
写真3：「沢野の懸垂訓練」：下から見上げているのが将利さん

（編者注）松田さんご提供の写真は口絵四頁です。

将利さんの想い出

黒澤　隆（十期）

中野区大和町180　田中将利　というと、やはり西高山岳部と西朋のベンチマークだったと思う。電話は380-0875だった。

これさえ覚えていれば何とかなるという安心感があった。福田さんと関谷さんの一件で、涸沢小屋で電報を書いたのもこの宛名だった。高校から変わらず五十年，年賀状を書き続け、また毎年返事をもらっていたのは唯一この住所ぐらいだろう。

私がリタイアして暇になったのでお邪魔しようと思

っていたが、将利さんはまだ現役のバリバリなので遠慮していた。そしたら突然の訃報だった。

最初にどこで会ったかは覚えていないが、西高山岳部入部のハナから私の頭の中にドンと大きく居座っていたことは間違いない。

最近になってよく丹沢に行くが、いつも思い出すのは将利さんの一言。「チロルハットなんぞかぶって、ザイル背負って、女物の赤い鼻緒の下駄なぞ履いて、、。」これが当時の丹沢族で将利さんのもっとも嫌いな一派だった。最初の山行であった勘七の沢で、渋沢から歩いてゆく途中、「ズック靴のひ弱な高校生が、、」と見下すような、それと思しき連中がいたものだ。

「歩く時はな、必ず両手を出していろ。ポケットに突っ込んだりするな。手はピッケルやザイル持つためにあるんだ。」

「新宿駅でヤッケ着ている馬鹿がいる。ヤッケは吹雪のときに着るんだ。」

「かもしかの尻皮なんぞで得意になって雪の中座ってるやつがいる。雪の中はいつも立ってろ。」

こんな言葉が、今でも山歩きをしていると、将利さんの顔とともに思い出される。

当時から、戸山高校の西穂遭難以来、高校山岳部のあり方について、とかくの議論が出ていた。将利さんは、OBによるしっかりとした指導で遭難は防げる、という強い信念を持っておられた。雪崩、ブロック、クレバス、滑落、これらにどう対処するか、どう訓練するかを、熱心に当局に説く場に同席した記憶がある。

高校生の頃は家も近かったので、しょっちゅう中野へお邪魔して話を聞いた。鶏冠尾根の話、ペデガリの猛吹雪と寒気、つるつるの穂高畳岩尾根。将利さんとしては脅し半分もあったろうが、高校生の私にはただ胸躍る題材だった。その中で、見せてもらった冬の滝谷第4尾根のCカンテの写真がいまだに忘れられずに脳裏に焼きついている。

「ずく」という言葉をたびたび聴かされた。東北弁らしい。まあ一言でいえば我慢、忍耐強いというところだろうか。山登りは「ずく」だ。お前たちにはそれが無い、と。

たしかに「ずく」が無くてよく怒られた。高校の春山で、空木へ行って、雨に降られ逃げ帰った。「ちょっとぐらいの雨でなんだ」とさんざんだった。OBになって白馬杓子岳へ行ったが、白馬も鑓も登らずにさっさと下りてしまった。高校生以下だと叱られた。どれも「ずく」の無いしょうも無い話だ。私の「ずく」の無さは将利さんに申し訳ないが今でも変わらないようだ。

いつだったか、浪人中だったか、OBになってからか、テントを燃やすという事件を起こしたことがある。当時では西朋唯一のナイロン冬天だった。無届個人山行だった。当然雷が落ちると覚悟して報告、お詫びしたが、ただ笑っておられた。あきれてものが言えないというところだったのか。

残念ながら、現世ではお会いするチャンスを逸したが、そのうちそちら行ってお会いしますから、その時は、「ずく」超超OB山行に入れてください。

山登りに関する兄・将利との思い出

田中　康弘（十一期）

兄・故将利が急逝して早くも一年が過ぎようとしているこのとき、西朋として兄の為に特別号の発行を企画するとの話で、身内の一人として誠に有難く思う次第です。

いざ私が兄・将利の思い出を書こうと五十年前の山行を調べてみたが、兄・将利とは実に七学年も年が離れている為、実際に同じ山行を共にした経験は少ないことが判った。従って、私を山登りに走らせた切っ掛けなり、山岳部時代に山登りに対する姿勢・考え方を教えられたことなど思い出すままに綴ってみたいと思う。

今、私の手元に私が小学5年生頃の自宅の庭での一枚のスナップ写真があるが、足に草鞋を履き（履かせ）、肩には麻のザイルを掛け（させて）兄が撮ったものである。この時兄は西高三学年であることを思うに、兄がアルピニストの卵として最も意気軒昂の時だったのかも知れない。

この事が潜在意識となって、後に私が西高に入学したとき直ぐに山岳部に入部した切っ掛けになったのかも知れないが、やはり私が中学生の時に兄が早稲田の山岳部で山に情熱を燃やしている姿（と言っても、実際にはほとんど家には居なかったのだが）に漠然とした憧れを感じていたからであろうと思う。

私の西高山岳部時代（昭和三十一年度～三十三年度）の記録を辿ってみると、兄は大学四年生から社会人の頃なので、実際に一緒に行った山行は一年次（昭和三十一年六月？）の谷川岳岩登り訓練と二年次（昭和三十二年八月）の剣岳夏山合宿の二回であったと思う。その時、山行中には「鬼の将利」との印象は殆ど感じなかったように思う。山に入れば兄弟の関係は端からなく、先輩の一人としてただ一緒に居るだけで存在感があって常に緊張を強いられた思いはあった。

一方で、兄の印象といえば、西高現役に対して直接指導するのではなく、学校側・父兄側に対して何とか山岳部の存在意義を納得して貰おうとＯＢ会（西朋）としての精一杯の努力を傾注していたかに思える。

勿論、我々現役組には折に触れて「スポーツアルピニズムとは」「ポーラメソッドとは」「山は登る前の準備が一番大切なこと。登る山の記録・文献を読み、登るメンバーの体調・チームの力など可能な限りの知識を入れておくこと」更には「ラジオの気象情報を聞いて天気図を書けなければいけない」etc　山登りに対する基本的な考え方、意識の持ち方を教えくれた。

これは我々に対し、「無防備に山に登るな」「山に怯えず、全てを傾けて山に向き合い、一歩でも自己を高める山登りをしろ」と教えてくれたと理解している。

西高卒業以来四十年以上もの間、西朋には全くご無沙汰しており、これから何かのお役に立てるのではと思っていた矢先に兄・将利の死に直面して戸惑っているのが正直な気持ちではある。

兄との思い出を探している間に、自分が若き時代に考えていた山登りが果たして現在に受け継がれてきているのだろうかとの思いと共に、逆に四十数年間も何も出来ずにいた自分が恥ずかしく、忸怩たる思いを拭えないことも確かである。

西高山岳部（現ＷＶ部）も六十年もの歴史を数え、ＯＢ会たる西朋登高会もかなり幅広い年齢層となってきた事実を踏まえて、この機会に今一度「西朋の有り方」「現役に対する役割」など皆さんとお話しする機会を頂けないだろうかと感じる次第です。

2006. 8. 13　記

スポーツアルピニズム？

関谷　興雄（十一期）

六十六歳になりました。所属しているトライアスロンクラブの自己紹介として「十年前より遅くても、今日より明日速くなりたいと思っている」と書きました。これは将利さんの影響なのでしょう。

「ある人にとって高尾山に登ることは、ある人がヒマラヤに登るより大変なことなのだ」というのも将利さんの言葉？

西高の山岳部に入って始めてスポーツアルピニズムという言葉を知りました。それからは、「他のひとにとっては楽でも、僕にとってはつらいのだ」と思いながら山行のたびにばててていました、というのは嘘ですが、「頑張らなければいけない」ということだと理解しました。

山行ごとにつぶれていたことが、今の私をつくってきました。山岳部の練習で二キロとか五キロを走っていましたが、いつもびりでした。そのことが、三十歳を過ぎてマラソンを始めたきっかけになっています。それから、トライアスロンを始めることになりました。今でも、現役のトライアスリートです。自分の駄目なところを「頑張って」出来るようにすることがスポーツアルピニズムの真髄？

考えてみれば、将利さんに私の人生はつくられてしまった？

初めての夏山合宿と将利さん

梶内　俊夫（十二期）

西高に入学し、山岳部に入部したのが昭和三十二年（一九五七年）のことだから、もう五十年も前のことになる。中学時代、蝶の採集に夢中だったので、山岳部に入れば珍しい高山蝶を採集できる、と考えたのがまことにあさはかであった。四月の川苔山、五月乾徳・黒金、六月丹沢そして、いよいよ夏山合宿の準備に追われるころ、目をギョロットさせた精悍というか、ちょっと凶暴そうな先輩が部室に現れた。あの人は誰と先輩に小声で尋ねると、「四期の鬼の将利さん」と答えがあった。柄は決して大きくないのだが、圧倒的な迫力で、早稲田の山岳部の主将を務めた人とのことだった。黒板にサラサラと登山ルートを描き、さらに剣の稜線を描いて、前剣、剣、平蔵谷、蟹の横這い、長次郎谷、東尾根、八峰等など大きく角張った字で書き込みながらルートを説明してくれた。

八月六日―十三日の夏山合宿は雨にたたられた。八日の朝は食事当番に当たっていたが、早朝からの雨で焚き火（当時は枯れ木を集めて炊爨ができた）が起こせず、朝飯が大幅に遅れ、かつ、ガンタ飯で結局、追分で停滞。現役リーダーはこっぴどく叱られた。十日に剣岳に登頂、十一日雪上訓練・岩登り訓練、十二日に剣沢を下って池の平まで、十三日はまた雨の中を下山、最後はトロッコに頼み込んで載せてもらった。チェックのシャツを着て、ハンチングを阿弥陀に被った将利さんは、二年部員にはものすごくきつかったが、われわれ新人には優しかった。平蔵谷出合で撮った集合写真をあらためて見ると、三十人を超えるメンバーが写っている。将利さんは後列中央にランニング姿でちょこっとはにかんだ姿で写っている。結構、照れ屋さんだったのだ。

あれから何年後のことだったか、すでに西高を卒業し西朋の一員になっていた。谷川の堅炭岩で岩登りを教えて

くれるということで、将利さんプラス数人で出かけた。その日もすごい土砂降り、岩登りはおろか濡鼠になって水上まで降りてきたが、途中で温泉に入ろうとしたが全て断られた。このときの将利さんは久々の登山だったのでないだろうか。しかし、歩くスピードに驚かされた。われわれ現役がゼイゼイしながら付いていくのが必死だった。

将利さんにはいろいろなことを教わった。「早寝、早飯、早糞」「焚き火とナニは弄るな」「リーダシップとメンバーシップ」等など、今でも心に生きている。われわれの山岳部は何しろ早稲田の山岳部のリーダー直々の指導だから、と誇らしかった。

本当に影響力のある真面目で人情にあふれた人だった。

将利さんを偲んで。

上遠野　清（十七期）

高校生一年のとき初めて将利さんとお会いした時の、衝撃、迫力は半世紀経った今でもはっきり覚えている。今、考えてみると年齢的には一回りしか違わないのにあの迫力。

私は、会社ではベテラン機長といわれているが、一回り下の後輩にあの迫力を与えているか、はなはだ疑問だ。当時学生運動が盛んで、よく、機動隊と全学連の衝突が報道されていたが、三浦等が何処で仕入れてきた情報か定かでないが、機動隊の中の第四機動隊、を〝あれは凄いんだぜー〟と言って〝鬼の四機〟、と呼んでいた。十七期の悪餓鬼共は、西朋四期の先輩たちを〝鬼の四期〟と呼んだのは当然のこと。

鬼の四期には、目沢さん、平沢さんが現役にカムバックしておられたが、御大の将利さんはごく普通に〝？？の将利〟と呼ばせて頂いた。

その将利さんの急逝された八月二十七日からもうすぐ一年経つ。

四十四年に福田さんが行方不明になった。前日まで川田さんと豪雨の上高地に行ってた社会人一年生の私は、再度休暇をもらい、高円寺の田中金属の二階事務所に集ま

った。重苦しい雰囲気の中、将利さんの体は、更にさらに大きく見えた。
最悪の事態を考えて、てきぱきと、指示を、出してた。スコップ、ツルハシ、驚いたのは、晒し何反、焼酎何本。何のために？との疑問は、現地に行って、その凄まじい黒部の荒れた現場を見た時に納得した。

現役時代に将利さんから色々、リーダー論を習った。
曰く、火と金玉は触るな！（人の金玉は触るな？）
何のコッチャ？
焚き火、特に雨降ってる時の焚き火でマッチ一本、新聞紙一枚で焚き火を成功させる極意 マッチの小さな炎から新聞紙に移し、細かく準備した枝に火を移して行き、やっと出来た火種を、いじくると焚き火は失敗する。火種、オキを、たとえて、教えてくれた。
この焚き火の技術は、今でも私にしっかりと引き継がれている。
曰く、リーダーたる者、休息時、荷を背負ったまま上方をみて立ったまま休め！
雪崩れの前兆をいち早くつかむためリーダーは上方を注意しろ、って教えだが、軟弱上遠野はいつもザックに座っていました。すみません。
曰く、アタック隊員は、金玉を、握って決めろ！
私の現役当時は、極地法登山、ポーラーメソッド全盛でした。ベースキャンプ、前進キャンプ、アタックキャンプ。ここで最終のＡＣから最後のアタック隊員は、皆の急所を握って、しっかりした者から選べ！との教えだ。
いつか、ヒマラヤに、っと夢に抱いていたが、残念ながら、私の現役時代には冬山に行く人数が少なく、形だけの極地法で白馬岳を白馬大池から行なったが、結果的に、リーダーの上遠野が天候判断を誤り、猛吹雪の中、前進キャンプに、向かわせた、が、一人が雪庇を、踏み抜き、遭難騒ぎとなった。
とても将利さんの教えを実行する段階ではなかった。
約三十年ほど前に、全日空の仲間と水上に山小屋を作り

ました。そのとき、風呂、ボイラー流し、洗面台、等々、田中金属から購入しましたが、代金は、定価の50％引き、且つ〃あるとき払いの催促無し。〃と凄まじい条件を、笑って許していただいたこと思い出されます。

本当は心の優しい、将利さん。数々の失礼お許しください。

将利さん。仏になった今、天国から、我々、後輩を、見守ってください。

二〇〇六年盛夏。　　上遠野　清。

「食う、寝る、撃つ」田中将利さんから聞いた言葉

山野　裕（十九期）

「食う、寝る、撃つ：山での生活の基本を高校生の時に身につけて欲しい。」これが田中将利さんから聞いた中で一番印象に残っている言葉です。

西高ワンダーフォーゲル部に入ったのが一九六四年（昭和三十九年）、四期の将利さんとは十五歳離れていて一緒に山に登ったことはなかった。氷川での西朋祭にこられたことはありました。一年生の時に二年生から将利さんの話を聞きに行けと言われて皆で田中金属に伺ったことがありました。初めは何しに来たと言われましたが、一年生の我々に対して山登りに対する考えをとうとうと述べられました。その後も何度もお会いした中でいくつか印象に残ったことを書きます。

一、食う、寝る、撃つ（疲れていても食べなくては明日の登山の元気は出ないし、朝飯を食べないで腹をすかしたままでは登れるはずはない。山でぐっすり眠れるようになるにはなれも必要だが、テントをきちんと張って、風雨に備えるなど準備も必要だ。食べたら出るのが当たり前。水洗トイレがなくてもどこででも雉を撃つ（排泄する）ようにならなくてはいけない。日常生活から規則正しい生活習慣を身につけることが大切だ。）

二、山は傾斜があり、岩や雪や人間さえも落ちてくるところだ。常に上に注意しろ。休むときは座って休むな。雪の斜面では音がしないので特に注意しろ。（本当に当

たり前のことだと思うが座って休みたくなることもある。でも常に上を見るようにしている。）

三、リーダーは go stop だけを決めればいい。（優秀なサブリーサー以下の上級生がたくさんいればリーダーの仕事はこれだけでいいんだろうが、中々今は人が少ないのでこれだけというわけにはいかないだろう。でも go stop を決めるのはリーダーの一番の仕事だ。

四、50:50 の時は go だ。（常に挑戦をあきらめないで全力を尽くす）

私が西高の一年や二年のときは雪山へは学校に隠れて登っていた。山行の前にはテントや装備を近くの部員の家に運び、そこで荷物分けをしたりしていた。三年の時だったと思うが、顧問先生や古くからの先生、ＯＢ、父兄が話し合って、顧問の先生がついて行けない九月以降の山行は西朋登高会の山行に高校生が個人として参加することで合意した。以降、毎年五月に新入部員が入ってところで、ＷＶ部の父兄会がもたれ校長先生以下学校側と西朋登高会とから、生徒と父兄に対してこの方式を説明し、納得してもらった。その父兄会で将利さんは「食う、寝る、打つ：山での生活の基本を高校生の時に身につけて欲しい。岩登りなどの高度な登山は卒業して大学に入ってからやればよい。安全な山登りを目指している。」といつも強調されていた。将利さんが参加されなくなってからも、父兄会では西朋からはいつもこの言葉を話した。

山登りのやり方が変わってきてはいますが、将利さんの強調された山での生活の基本は変わらないものとして伝えていかなくてはと思っています。

ご冥福をお祈りします。

田中将利さんを追想して

伊東　伸作（二十一期）

将利さんは少し早すぎでした。十年近くお目にかかっておりませんでしたが、もう一人の〝まさとし〟（中村正俊、僕の同期）から、いつも変わらずお元気そのもので全くお変わりがないと聞いておりました。

僕らの時代の西朋登高会は、東大紛争の直後で先輩・仲

間が皆地方に散らばり、山野さんと二十一期の喜仁・正俊の三人で活動しておりました。小川さんや梶内さんは、大学の研究室にいらっしゃり時々山に同行してくれました。そんな中、将利さんは、田中金属の社長としてご活躍の一方で、何くれと無く僕らの面倒を見てくれました。よく田中金属に出向いたり、ご自宅のマンションに伺って奥様にお世話になりました。お葬式の際には、久しぶりに奥様のお顔を拝見し、悲しみの中にも昔と変わらないご様子を拝見し安心しました。

将利さんからは、よく山での原理原則を聞かせていただきました。特に、自然の脅威を常に念頭において活動するよういろいろな話しを伺ったことは今でも忘れておりません。雨の中での火のつけ方。スキーのストックが竹で無ければならない理由など。お説教に近いものもありましたが、そうしたお話しを素直に聞けたのは、今思うとよくご馳走してくれたからかなと、思い起こしております。

生まれて初めて食べたエスカルゴは、将利さん夫婦に小生の結婚祝いにご馳走になったときの新宿でのレストランでした。荻窪のマンションでは、奥様にカレーなども振舞われました。就職の際にはツテが無かったので、将利さんに頼み込み紹介者を立てて頂きました。実は、僕が志望した会社には、将利さんはまったく知り合いも居なかったにも拘らず、何とか関係先を見つけ出して紹介してくれました。感謝のしようもありません。

何だか、奢ってくれたから褒めているようなきらいになってきましたが、将利さんは四期、

僕は二十一期で十七歳も年齢差がありました。そんな僕ですら世代を超えて面倒を見てくれたわけです。他の皆さんも、将利さんから同じように助けて頂いていたのでしょうね。

僕は、今ではその会社も辞めてタンカーのブローカーに勤めております。当年とって五十五歳。社会にでると色々なことがありますし、様々な人にも出会いましたが、将利さんはいくつになっても将利さんでした。大きな目をむいて、大声でしゃべりカラカラと笑う。告別式で近影が展示してありましたが、昔とひとつも変わりがなかったです。

今後こんな人は二度とは出てこないのだろうなと、これを書きながら追想しております。
有難うございました。合掌。

二十一期　伊東伸作

『ライオンズクラブ』

渡辺　喜仁（二十一期）

手許に、笑っている田中さんの顔が印刷された名刺がある。二年前の四月、西朋総会のあとの二次会の『新京』でいただいたものだ。この日、私は所要で、総会には出られなかった。『新京』に着いたのも十時過ぎで、若い人たちの姿はすでに半分ほど消えていた。でも、奥に、田中さんを中心に年配の人たちが語りあっていた。
「キジンか。今はどこに勤めているの。北中野中か、よく知っているよ。ライオンズクラブでは、中学生向けに、薬物乱用防止や、喫煙防止の講師を派遣している。いい講師がいるから手配してあげるよ。」ちょうど、中学一年生を担当して、六月に喫煙防止教室を開く予定だったので、渡りに船とお願いをした。やがて田中さんから、M氏と連絡を取るようにと学校に電話があった。M氏の講演は好評だった。『新京』で、名刺をいただいた名刺は、山の本の間に挟みこんである。
私の宝物のひとつとして。私自身、高校を卒業したあと、早稲田の山岳部に二年間、入部していた。田中将利さんも同じ山岳部の大先輩であり、当時、部長だった浜野さんから、よく田中さんの逸話を聞かされたものである。三年目に西朋登行会に入会して、伊東伸作や中村正俊と一緒に、沢登りや高校生の登山の付き添いなどもした。私たちが西高に入学してワンゲル部の新入生歓迎会は、川苔山で、先輩が前日から塩地谷造林小屋に入り、カレーライスで新入生を迎えてくれていた。この歓迎会にも田中将利さんが参加していた。中村は、同じマサトシなので、以後、中村とは呼ばれず、ワンゲル部ではマサトシと言われ続けた。思えば、私たちの二十一期の男子の多くが名前で呼び合うことになったのもマサトシ以来の伝統だったかもしれない。シンサク、タイチ、タイスケ、キジンと続く。

黒部で福田さんが遭難した時には、田中金属のビルの会議室が遭難対策本部になっていた。そのビルも田中さんが亡くなる直前に新築され田中金属もこれからさらに羽ばたくというときの訃報であった。田中さんが亡くなられたとき、ちょうど、奥多摩の氷川で西朋祭が開かれていた。弟さんの田中康弘さんと、たまたま将利さんの話をしていたのも、因縁を思わせる。北中野中学校では今年も、ライオンズクラブの方にお願いをして、薬物乱用防止教室を開いた。田中さんのささやかな置き土産である。

田中将利さん追憶

中村　正俊（二十一期）

将利さんとの出会いは、どうもはっきりしません。ただ、昭和四十一年の春、ワンゲルに入部した早々から、マサトシという名前だけで先輩から盛んにイジメを受けたような記憶はあります。マサトシさんとは、一体どんな人なんだと思ったものです。

下界ではともかく、肝腎の山での記憶がおぼろげで、要するに雲の上の人というイメージでありました。しかし、今振り返ってみれば年齢差はただの十七才であり、こちらがひっちゃきに登っていた二十才前後にも、将利さんは三十七才と、まだまだ青年の域だったことになります。どうもあの声と押し出しに負けて、あまり交流が成立しなかったように思えますが、将利さん自身もすでに事業の方にほとんど全精力を注いでいたんでしょうか。

その後、随分間があり、お互いの仕事に絡めての接点が復活しました。

平成三年初（私は四十才で将利さんは五十七才）、私が某銀行勤務で海外から帰任し支店に転勤し（飛ばされ）たところ、それが偶々将利さんの会社の取引窓口だった訳です。バブル潰れが段々と拡大・深刻化していく不気味な情勢下でしたが、工場見学の名目で酒とゴルフを振舞って頂く等、一見のどかなお付き合いの中で、あの包容力と突進力で頑張る姿を垣間見させて貰いました。

じきに転勤となりましたが、その後も会う毎に、昨年

春の西朋総会で最後にお目に掛った際まで、銀行の取引姿勢につき種々問い質されました。

私はもう銀行から某会社に移っていますが、将利さんがなお、お元気であったなら、こっちの仕事をちょっと手伝え、などとお声が掛ったのではないか、と思い浮かべることもあります。とにかく、人を集めたり、人を動かすことが好きでかつ旨い人でありました。

訃報はあまりに唐突でした。まるで岩から落ちたか、沢で鉄砲水に呑まれたか、どうにもいきなりあの世に飛び移ってしまったような印象で、将利さんらしいお別れの形なのかも知れません。

ご冥福をお祈り致します。

（追　想）

入戸野（秋山）まゆみ（二十一期）

将利さん（大先輩である田中さんをこのようにお呼びするのは失礼であると思いますが、我々西朋の後輩にとっては、「将利さん」という呼び方しか考えられないのでお許し下さい。）の突然の訃報を聞いてから早いもので一年近い年月が経ちました。

将利さんは西朋四期、私は二十一期で、山行をご一緒させて頂いたことはありません。私が最初に将利さんにお目にかかったのは、福田さん（十四期）が黒部で遭難し、西朋の捜索隊が結成され田中金属に集合した時でした。緊迫した状況のなかで、てきぱきと指示をされている将利さんという鬼の四期のリーダーとして勇名をはせた大先輩がおられることを知りました。

西朋での活動を終え、旅行代理店に就職した私はセールス担当になり、将利さんにお願いに伺うと、直ぐに、将利さんの同業者の方々の沖縄旅行を任せてくださいました。私にとって三回目の添乗でしたが、不慣れな独り立ちしていない私を、時には社会の厳しさを教えつつ、暖かい目で見てくださいました。将利さんは、お酒がお飲みになれないのに、よく、私たち西朋の後輩をバーやキャバレーに連れて行って下さったりして、親とも違う人生の先輩として指導して下さいました。その後も団体を紹介していただくなど何かにつけてお世話になりま

したが、特に、昭和五十五年、主人（西十七期）と結婚するときに、私は主人も頭が上がらない将利さんにと思ってお願いして将利さんご夫婦に仲人になっていただきました。

その後、主人が弁護士として田中金属の仕事をお手伝いすることになり、主人の方が将利さんとお目にかかる機会が多くなりました。さらに将利さんの次女の佐和子さんの仲人を私たち夫婦に勤めさせていただくなど、夫婦そろって将利さんのご家族とお付き合いをさせていただくことになりました。

鬼の四期のリーダーとして恐れられた将利さんは極めつけの愛妻家で、お二人のやり取りを伺っていると、思わず吹き出したくなるようなこともありました。先日、奥様と電話でお話した際、奥様は「何故、パパ突然逝ってしまったの、ひどいじゃないの」と問いかける日も多いとおっしゃっておられましたが、お二人は本当に仲の良いご夫婦でした。

将利さんのご自宅でのお通夜の日、弟の康弘さん（十一期）に将利さんの高校、大学、西朋時代のアルバムを見せて頂きました。そこに写っているメンバー、山、本当に懐かしく、西朋の創成期を初めて見ることが出来ました。アルバムには、将利さんの几帳面な字で沢山のコメントがありました。それを拝見して、今更ながらに豪放磊落な性格の一方で、将利さんの細やかな配慮が思い出されました。

この十数年、主人は将利さんと良くお目にかかっていたようですが、私は子育てもあり、すっかりご無沙汰していて、いつも将利さんにお目にかかりたいと思っていました。そんな折、私が将利さんの訃報を聞いたのは、主人が九月には将利さんと夫婦一緒に食事をしようと約束したと言っていた矢先のことでした。本当に残念でした。私は、学生時代から鬼の四期のリーダーである将利さんの父親とはまた違った優しさに触れながら成長させて頂きました。本当に、ありがとうございました。

2006/7/15

四つボタンの田中さん

森川　直人（三十五期）

田中さんというと、まず四つボタンのブレザーを思い出します。白い帽子をかぶってパイプでもふかせば、「海のマドロスさん」といった風情で、これをハイカラと呼ぶのか・・・と妙に納得したものです。どこぞの哲学者が、ナポレオンの凱旋行進を「目の前を時代精神が通過して行った。」と形容したそうですが、まさにそんな感じです。「目の前を創設者が通過して行った。」

三十期以上も離れているので接点は総会に限られますが、時折お聞かせいただいた創設初期の模様を、楽しく思い出します。「おやじさん！」と声をかけたくなるような話し振りで、会社の朝礼でもこの調子で喋っておられていたに違いありません。（ひょっとして、夜の銀座でも・・・？）

特に印象に残っているのが、奥多摩山行に百人ぐらい集まった時の話。戦後の食糧難で、皆の目当てはイモ堀だったとかそうでなかったとか。毎年が存続の危機（？）となっている現在からすると、隔世の感ひとしおでした。

西高もいつのまにやら六十期。それどころか、新入生はみな平成生まれ。田中さん、昭和は遠くなりにけりです。

田中将利さんを偲んで

上野　午良（三十七期）

「威圧感があって存在感のある西朋の大先輩、田中さん」というのが、私の持つ田中さんの印象でした。これまで様々な諸先輩の方々から田中さんのお話を伝え聞いており、総会などでお会いする度に、圧倒され恐縮しておりました。

田中さんとは、さすがに山行をご一緒させていただいたことはありませんが、毎年四月の総会には何度か出席され、その都度、昔の西朋創設期のご苦労や逸話など聞かせていただきました。昨年(二〇〇五年)の総会時には、今の若者をはじめとする現役陣に対して、山への対峙の仕方、姿勢やマインドに関して懇々とメッセージをいただき、改めて我々、今の西朋現役として身につまされた

ことを思い出します。この講話が田中さんからの最後のメッセージとなってしまったことは本当に残念です。

歴代の西朋会員を代表する存在でもある大先輩田中さんがお亡くなりになり、西朋にとって大きな後ろ盾がなくなってしまった感は否めませんが、西高ワンダーフォーゲル部のＯＢ会として西朋登高会が存在しているのも、田中さんをはじめとする西朋黎明期を担われた諸先輩方の精神が脈々と引き継がれている証でもあり、その先代からの西朋精神（スピリッツ）を継承していくことが、残された我々の役目でもあると思っています。

昨今、若者の登山人口の減少が叫ばれて久しく、西高ワンダーフォーゲル部卒業に引き続いて西朋で山を継続する者が少なくなり、活動自体が低調になってきていることは反省点ではありますが、志向やスタイルは変われど、田中さんをはじめとした諸先輩方が築き上げた西朋を引き継いでいくことを使命として活動の灯を絶やさぬようにしていきたいと思います。雲の上から田中さんから叱咤をされぬよう・・・・・。

最後に、これまでの西朋登高会における田中さんのご尽力にあらためて敬意を表し、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。